

## 令和5年度第1回まちづくり戦略プロジェクトチーム議事概要

日 時：令和5年8月9日（水）13:30～15:00

場 所：県庁本館4階地方創生局長室（一部オンライン）

### （1）事務局より資料説明

- ・資料1について、地方創生・移住交流課より説明

### （2）委員発言要旨

（前田座長）

- ・資料1の補足をする、タイプ3の例に「まちづくり組織」と書いてあるが、しあわせデザインという組織が、4月4日に法人登記された。しあわせデザインの方向性は少しずつ見えてきているが、世の中に対する立ち位置や活動内容等は、8～9月で完成度を高めたいと思っている。
- ・しあわせデザインの活動と、まちづくり戦略PTの間では、どうしても連携や役割分担の話が出てくる。しあわせデザインは一般社団法人としての動きになるが、まちづくり戦略PTは、単年度で県の予算を取って活動し、最終的には、抽象的だが、成長戦略に掲げる「幸せ人口1000万人」の実現を目指していく。
- ・タイプ1や、タイプ2のような人は、先ほど「発掘」と言ったが、普通に活躍されていて、知るべき人に知られていないだけだという可能性もある。何かやりたいと思っている人に対して一緒に活動して伴走する人、お金や情報等のネットワークを提供する人、自分ではできないが応援する人が三位一体となって、どんどんはねていく。タイプ1、タイプ2の人たちを気持ちよく活動させてあげることが大事であり、まちづくり戦略PTでは、県の事業として、タイプ1、タイプ2にフォーカスした活動として何するかを決めていく。

（明石委員）

- ・資料1はぐっと1枚にまとめてあり、いいと思う反面、こんなにまとめていいのかという思いもある。まちづくり戦略PTの課題を見ると、環境をつくるということと、それに必要な人をどうやって増やすかということ。今までの議論の中で、割と具体的なアイデアも出てきた気がするが、おさらいしなくても大丈夫かという不安があった。
- ・タイプ1、タイプ2の人達に対してどう取り組むかだが、しあわせデザインは一般社団法人の活動だとしても、切り離すことができない。一般社団法人の中間支援組織ができつつ、まちづくり戦略PTの中でどうやるか、接続の部分を考えなければいけないのではないかと思う。
- ・KPIでは、まちづくり組織を県内に15組織を作るとされており、それがしあわせデザインとの接続なのではと考えたが、そのKPIに向けてどうするかといった点も議論しないといけないと思う。

（佐藤委員）

- ・魅力ある田園地域づくり専門部会が、月1回のペースで開催されており、前回の会議では特に人づくりを重点的に話していた。ただ、専門部会の議論が進む中で、人づくりはまちづくり戦

略PTで議論し、専門部会では他の話を進めていくと聞いている。人づくりはとても大事な要素であるが、まちづくり戦略PTは8月・9月だけでどこまで深めることができるのか、2回だけで本当にいいのかとは感じている。

(前田座長)

- ・このPTで人づくりを深掘りして議論していくことでいいのか。

(戦略企画課)

- ・都市部と田園地域の2つ大きなテーマがあるところ、昨年度のまちづくり戦略PTで、あまり田園地域の話ができなかったという話があり、田園地域の部分は、今年度、専門部会を立ち上げ、資料2でお示ししている重点的検討課題2点を検討していく。
- ・佐藤委員がおっしゃった通り、専門部会で議論する中で、やはり人材は大事な要素だという話も出てきた。一方で、まちづくり戦略PTのKPIも視野に入れた議論をイメージすると、PT本体で人材育成の話をしているので、そこは切り離して議論しようという整理をしたところ。
- ・専門部会には明石委員に座長を務めていただいているので、専門部会での議論を報告いただく形で、専門部会での議論をPTに反映いただけると有難い。

(明石委員)

- ・後ほど報告するが、人づくりに関して、田園地域、特に過疎地域はマンパワーが足りないのので、うまくリンクしてフォローしていきたいと思っている。

(田辺委員)

- ・人づくり、人材探し、いろんな言い方があるが、実験も含め、そろそろ実行に移す具体策があってもいいのではないかと考えている。
- ・夢や課題意識を持ってまちづくりをすとか、仲間を見つけて具体的なまちづくりの行動を行っているところとの接続点が、今全然ないような気がしている。街で毎日出勤して、商売やって、家に帰ってという生活を送っているが、街の中にも、こちらから進んで接続点を持ちに行かないと、なかなか生まれるものではない。
- ・「なんとのね」という、南砺市で世界や日本でも最先端の農業をやっている若手の方が、微生物で堆肥を生み出す新しい事業を始めようとしており、富山市のまちなかと接続したいという動きがある。SDGsの文脈もあるが、新規就農者を増やしたいという人材確保の話でもある。南砺市内や自分たちのネットワークだけで募集しても埒が明かないから、大きい活動に発展させて見せていく必要があるという話をしている。
- ・南砺市や郊外にいる就農者の方など、堆肥が必要な方と連携をとりながら、まちなかで堆肥の材料を集めるプロジェクトを発足させ、広域的に活動しながら、そういう話に興味のある人やゲストを呼んでトークショーをやったり、学生を参加させたり、いろんなことをやっていると、先ほど前田座長が言った、発掘というよりは、元々いるであろう人々の接続に近いイメージで、勝手に人が生まれていくと思う。
- ・県内それぞれの市町村に既にあるテーマ設定に対し、学生、町内会、地域おこし協力隊や自分

たちのようなプレイヤーが、次の可能性に対してアクションを起こせるかということだと思う。そこから出てきた人たちがどんなキャスティングで出てくるかは未知数だが、結構面白いものが出てくるのではないかと考えている。

- ・実際、南砺市は武蔵野市の吉祥寺と連携して何かやろうとしており、県外にも出ている。微生物堆肥は地方の方が作りやすいが、それを買おうとするとなかなか手に入らない。でもそういう土を使うと、あまり薬を使わなくても元気に野菜が育つということを言っている。そういうことに対して、今の若者は反応力が高いと思う。そうした取り組みの中に巻き込んでいく仕組みのようなものを、例えば令和6年度から始めようという話の流れに持っていったらいいと思う。

(前田座長)

- ・具体的な話で、既に市町村の区域をまたいでいるということがとてもいい。

(田辺委員)

- ・あまり話を一つのポイントに小さくしていくよりは、できればもう少しスケールを広めにとった全体的なビジョンのような話も必要ではないか。
- ・例えば、すしのブランディングも、魚と米だけで行こうとしてもなかなか難しいが、食全体に対する豊かさ、背景にある自然や水の豊かさや、数字が日本一で、観光も面白い、事例もたくさんあるという形になれば、ある意味すごい人なんて勝手に集まってくるだろうし、まちづくりの可能性だとも思う。
- ・こうした内容をカテゴライズせずにとんどんとらえていながら、県全体の育みとしての方向性に持っていければ、市町村を超えたプレイヤーが集まって、何年間も議論している意味も出てくる。先ほどの農家の話も、現状は南砺市と富山市だけだが、全市町村に広げていくことはできる。農林だけの話ではなく、その価値そのものが富山県の特産であるようなところまでいけたら、とても面白い県になるのではないかと思います、先ほどの提案をさせていただいた。

(前田座長)

- ・このPTで最終的に期待されるゴールについて、もう少し具体的に言語化できないか。個別の活動をたくさん提言しようということではないとは思いますが、もう少し解像度をあげられないか。

(竹内局長)

- ・まちづくりに取り組んでらっしゃる方を応援する仕組みとして、どういう制度を予算化すればいいかということまで具体的なお話が進めば一番有難い。

(佐藤委員)

- ・高校生や中学生のうちに、どれだけ地域に関わることができるか、どれだけ地域の魅力ある人に出会うことができるかということが、今後、富山に帰ってくるかどうかの大事な点となってくる。学生がクラブ活動に充てている時間の何割かを、地域の活動に充てられるよう、教育委員会等と連携して、まちづくりに若い人が参加できるようにできないか。

- ・中山間地域では、話し合い促進事業という、それぞれの自治会等の単位で地域の人が話し合う場を設ける事業がある。県が定めているファシリテーターの方が来て、地域コンシェルジュの方も伴走する形で、何回かにわたり、地域の未来がどういうふうになるべきかという話し合いを伴走する制度があるが、結構年齢が高い人たちに向けての制度なので、本当は女性や若者が話し合う場が必要で、そこを伴走する形でのファシリテーターが欲しいと思う。
- ・山崎委員は、イナミライという形で、20代から40代の方々を集めての話し合いを持っている。この取り組みはとてもすばらしいと思っており、ファシリテーターの存在が必要だと思う。

(明石委員)

- ・人づくりについて、まちづくり戦略PTで集約して議論する流れになっているが、県全体で共有できる具体的なテーマ、課題があれば、人材派遣チームやコミュニティ活性化コンサルチームのような、プロフェッショナルの人に入ってもらえることができるが、県の施策となると、コミュニティのボトムアップ型の問題解決手法にはなかなか手を出しづらい面がある。
- ・このため、先ほど佐藤委員がおっしゃった専門家派遣、例えば、山崎委員のような人が来てファシリテーションし、ある問題に対し、特に女性とか若者が意見を言いやすい環境づくりをし、計画・ビジョン作成をしてくれるプログラムは、県にはない。どちらかというとし町村単位の役割だと思うが、具体的な分野や全体で共有できる課題がなくても、ボトムアップ型で、自分たちはこういうことがやりたいというところから、どうやって実施するかを支援するチームが県の中にあってもいいと思う。それも一つの環境づくり、仕組みづくりではないかと思う。

(前田座長)

- ・県のまちづくりの活動として、こうした制度がそろそろあってもいい。しあわせデザイン以外にフレームワークとして何か考えるものはあるか。

(明石委員)

- ・KPIで15市町村、各地域に支援組織を作るという話だが、県が関与しやすい関係性の各市町村のプラットフォームや支援チームがあり、しあわせデザインとうまく接続する感じか。しあわせデザインは、まだリソースも全然ない中で全県やるのはとても大変なことだと思う。
- ・山崎委員のように、井波にどっぷり入って、あれぐらいの集落単位でプロがこう入っている感じがちょうどいいと思った。
- ・県の施策としてやる場合は、支援チームの派遣などを、制度として持っておいてもいい。その地域に住んでいて支援をやりたい人もいると思うので、例えばある要件をクリアした人やプロポによる提案型で募集してもいいし、仕事としてできる環境を整えればいいのか。現在は、ほとんどボランティアか、県外から来たプロの人という両極端な状況だと思う。

(前田座長)

- ・田辺委員から話のあった、南砺市と富山市のジョイントに対する話と、今の専門家派遣の話は別ジャンルか。

(明石委員)

- ・同じ。中身を知らなくても、チームでやることは一緒だと思う。プロジェクトを多く立ち上げた人は、やったことがない環境に急に入っても、ある程度手法や進め方は、心得ているのではないか。
- ・例えば、富山市だと大きすぎるのでいくつか分けるべきだが、富山市中心部チームと南砺のチームがコラボして、しあわせデザインや県が関わって次の計画ビジョンができて、何か事業化したらいいという話になれば、県や市町村にもできることをやってもらいたいと思う。

(田辺委員)

- ・南砺市の堆肥の材料を集める生ゴミプロジェクトを、富山市内の大企業に提案したが、においが出る等の懸念点を挙げられ、断られた。狭い視野で物事をとらえると、近隣の目だけが気になるという発想でやめてしまうということ、この件以外でもまちの中で多々感じる。
- ・中の人だけでやらずに、もう少し広い視野で見ながら、一つ一つ可能性のあるプロジェクトに対してコメントしていく事例があってもいいのではないか。それは井波もそうだったと思うし、立山町もかなり動いていると思う。

(竹内局長)

- ・先ほど佐藤委員にご紹介いただいた中山間地域の話し合い事業は、集落単位で地域コンシェルジュという県の担当者がお伺いし、ボトムアップでその集落として何をやりたいか計画を作っただけ、その活動を中山間地域のチャレンジ事業で応援するという仕組み。県内すでに50数か所で実施している。
- ・例えば、先ほど田辺委員に紹介いただいたような活動が、ビジネスの専門家からアドバイスが欲しいときに、専門家を派遣するとか、専門家派遣の経費を県が見るといった制度を作ることあり得る。つまり、今、中山間地域で主にやっている事業を、地域に関係なく行うというような事業が一つ考えられるのではないかと思っていた。
- ・その専門家を常設という形にするのか、その時その時に応じてお願いして来ていただくのか等、色々なやり方はあると思うが、単発ではなく、県の制度として持続的な仕組みを作ること考えられる。

(明石委員)

- ・ある集落で、県や専門家の方が入ってやると、経過や結果を全体で共有できないというもったいなさがある。
- ・常に俯瞰している総合ディレクターみたいな人がいたり、各地域で取り組んでいる専門家の人たち同士のネットワークなど、常にコミュニケーションできる場があると、先ほどの富山と南砺の連携のような事例が生まれやすいと思う。今、県にあるその制度を基盤に、より拡充拡大したようなものを、まちづくりPTのアウトプットとして考えていったら面白いのではないか。

(佐藤委員)

- ・県職員は2～3年で異動する中で、地域コンシェルジュたちの中で、人の繋がりや情報がどん

どん蓄積していつている。そういう立場の方がいることが必要。

(前田座長)

- ・ 県が市町村と連携して、外部から専門家を派遣しコネクしていく専門家支援が1つの施策であり、各市町村にそういう人や、15組織が何らかの形であって県が予算も含めて下支えしているという仕組みや制度や資金面としてあるといいということか。

(明石委員)

- ・ 本当は市町村で作るべきだが、市町村で作るとなると行政の境界線が跨ぐのがよくない。県と地域の窓口が直で結ばれていれば、県の中で情報共有しやすい。

(前田座長)

- ・ 例えば15市町村の小さなコンシェルジュ組織のようなところは、しあわせデザインの小さい版のような形で、基本的には民間で作られている。行政が入ると、時間がかかって面倒なことが起きるからという考え方だと思う。

(明石委員)

- ・ やはり現場感覚は大事なので、県庁の担当者が必ず一緒に行ってくれて、内部で部局横断的に情報共有しておいて欲しい。

(前田座長)

- ・ しあわせデザインに参画して議論していただいているメンバーは、いろんな市町村から来ているが、例えば、田辺委員は、中心街で映画・音楽、カルチャー、明石委員は、建築も含めたコミュニティや場のデザインと、持っている武器は違っている。県としては、市町村に尖った武器を持った人が散らばっているっていうことを、うまくネットワーキングしたらいい。
- ・ 市町村単位で15組織ということは確かに必要だが、その15組織のトップや責任のある人たちがそれぞれ持っている得意技をちゃんとネットワーキングするという2軸が必要。先ほどの南砺市と富山市の連携は、田辺委員と南砺市の山崎佑二郎さんの強みが結びついたという話であり、市町村というよりは、人と人の持っている武器が結びついている。

(田辺委員)

- ・ 山崎佑二郎さんも、南砺市の市長や農業担当課に話をもち込んだ上で、時間がかかるため、自分たちでイベントするぐらいの体力があるから、今年の11月に桜クリエで、土の力と題してイベントをやろうという話になった。6月に相談して、11月には事業実施予定であり、民間同士で決着すると、とても早い。

(前田座長)

- ・ 山崎佑二郎さんは南砺市に対し、何をお願いしに行ったのか。

(田辺委員)

- ・ イベントのバックアップやサポートを依頼した。南砺市で農業をやり、世界に発信したいと思っている彼らからすると、南砺市が後援や資金提供などにより支えているかどうか仁義は通している。南砺市長は、農業などにもともと興味のある方なので、もちろんバックアップすることになったりしている。今、ゴールドウィンが桜ヶ池でエリア開発を始めたが、地域住民でも反対する人は出てくると思う。就農者からしたら水の質が悪くなるとか、いろんな問題が出てくる。ゴールドウィンに直接対話しに行った方が早く、ゴールドウィンがそのイベントに対して協力する姿勢も見せ始めており、彼らの熱意が伝わったようなところもあった。市町村を超える時、その首長同士の仲がどうだとか、民間からしたらわからない世界の話の影響が出てしまう。
- ・ 微生物の有機堆肥のプロジェクトは、休眠預金の活用を行う基金から結構な金額が入るということで、ある程度の資金を持った上で、今本格的に動き出そうという状態。富山県もこういうものに反応した上で、市も動いているのだったら、この制度を使ってこういうサポートするといった動きがあると、民間のプレイヤーと県が繋がり始め、風通しが良くなるのではないかな。

(前田座長)

- ・ 今の明石委員と田辺委員の話で、その先が見えてきた感じがする。実際に、15市町村の支援組織等で、コンシェルジュやファシリテーター的に動く人が持っている武器をうまく組み合わせ、市町村の行政が絡まずに、市町村の枠を超えて、県が直接民間プレイヤーの運営する支援組織等をバックアップしているという枠組みか。

(竹内局長)

- ・ 今、民間で15組織を作るとなると、例えば、PTの委員や、しあわせデザインに参画いただいている方たちが、各市町村における組織の中心になっていただけるという理解でよろしいか。

(前田座長)

- ・ しあわせデザインとのリンクが個別にどうなるかについては言及を避けたいが、できることから作って行って15組織を目指し、最終的には全県に作ることはできると思う。

(竹内局長)

- ・ まちづくりを市町村と関係なくやっていくのはなかなか難しい部分があると思う。ただ、市町村等との関係を重視するあまり、時間がかかりすぎる等の弊害があるということであれば、市町村と話をするが、市町村と一緒にやってくれなければ前に進まないというものではない制度を考えていきたいと思う。

(佐藤委員)

- ・ まちづくりをする時に、地域や市町村をないがしろにして進んでいくことが必ずしも正解ではないと思う。何かを始める時に、地域への理解を求めて行動してくださる地域の要の方が1人でも参加してくれるのが本来の一番いい形だと思う。

- ・市町村を完全に無視する形で、地域づくりはできないと思うので、地域住民に了解を取っておくのを前提に、県が応援するのであればいいと思う。新しい事業と、もともとその土地で暮らしてきた方々をつなげる接着剂的な人材や情報が本当は一番大事だったりする。新聞など後からしか情報を聞けないとなると、地元の方は不信感から入るしかないなので、その点を押さえた上で進めたい。

(田辺委員)

- ・先月末に「なんとのね」の集まりに行ってきた。メンバーを聞いたら、先ほど佐藤委員がおっしゃった通りで、若手の農家たちだけで決着したのではなく、その地域に長く住みながら実際に農業やられている60代ぐらいのボスクラスの人も活動に参加されていた。
- ・地域に根をおろして地元の方とコミュニケーションとっていく中で、地元の重要人物が活動を理解して賛同することにより、今のような動きに発展していることも事実だと思う。

(前田座長)

- ・各市町村におけるしあわせデザインの小さいバージョンに入る人は、地域住民の要となる方が、その中核になるべきであって、しあわせデザインの人があるまま入るのは、何となく違和感もある。佐藤委員は、15市町村にそういう組織ができたとしたら、地域住民の要となる人にトップに立って欲しいか。

(佐藤委員)

- ・トップでなくてよく、メンバーの1人として入っているのが大事だと思う。新しい要素が生まれるには、よその人や若い人の意見をくみ取ってくれる空気感が大事だと思う。

(明石委員)

- ・15市町村と言ったが、実際はまとまりを考えると、射水だと新湊地区ぐらい、富山市だと富山市中心部ぐらいの規模にする必要がある。提案制度にして、自分たちがこのエリアでやってみたいという範囲を決めてもらい、その応援組織を作る方がいいのではないか。提案してくれない場所もあるかもしれないが、よい地域なのでこの地域にあってほしいという、周りからの呼びかけも必要か。
- ・例えば、1年目は県内で組織のモデル作りに協力してくれる地域と組織を3地域程度募集し、それで徹底的に回してみても、課題や問題を全て出す。翌年度は、このモデルを学びながら、モデル地域の人たちも、他地域の組織づくりを応援してくれるから、2年目は5地域募集するという形でやっていけばどうか。

(前田座長)

- ・今の議論の中で、フレームワークやタイプ1～4にも繋がるような流れが少し見えたように思う。PTはあと何回やるのか。



(竹内局長)

- ・ 9月末に1回はやらせていただきたい。
- ・ 明石委員に座長をお願いしている専門部会の議論は、このPTの方にも深く関係していると思うので、明石委員からご報告をいただきたい。

(明石委員)

- ・ 専門部会は、まちづくり戦略PTからテーマを切り出し、これまで4回開催した。具体的なアイデアベースや提案型の話を多くいただいており、田園だから農業というわけではなく、暮らし、生業、インフラなど様々なテーマと課題がある。それを網羅的に一旦議論し、特に先行してやってみようというものを県で事業化してもらおうという考え方でやっている。
- ・ 検討課題の1つ目が、田園地域の資源や特徴を再評価して魅力を創出すること。そこに住んでいる人だけではなく、県内外との交流も必要であり、交流の循環を生み出すためにどうするかを議論している。これに対する取組みの例示の一つが、田園地域をフィールドにした芸術祭を行うこと。求心力を高めるために、イベント仕立てにするが、単なる芸術祭に遊びに来て観光客が増えるのではなく、田園地域に多くある空き家を会場にしたり、交通手段を途中で切り二次交通の実験ができたりということで、その田園地域のポテンシャルを再評価する。それだけではなく、いろんな暮らしや文化に気付くきっかけにする。そこに住んでいる人の誇りもプラスになり、通ってくる人が地域のファンになる。例えば朝日町のバタバタ茶の伝承館のような交流拠点が必要だとか、田舎料理をすてきな器とデザインでうまくラベルを張りかえたら急に良いものに見えるとか、そんなラベル替えをどんどんしていこうという話が具体的に出ていた。
- ・ 検討課題の2つ目が、田園地域と言っても第一次産業だけに頼らない、生業づくりをすること。やはり食っていかなければならないが、大きなビジネスではない。先ほどの「なんとのね」の話はぴったりだと思うが、専門部会でも堆肥ビジネスができないか、薪ストーブを持っている人が結構いるので、薪をストックし、不必要なものは売ってお金にするとか、薪割り体験自体をイベントにしようという話もあった。また、田園地域に来た人と、稲刈りや新米を結びつける農家民宿のようなものを絡めた体験イベントをすとか、薪割りのコミュニティが観光になるとか、何か今までの発想とは違う生業づくりをしなければという話が出ている。
- ・ 先ほどの検討課題1にも関わることだが、単なるイベントをやるのではなく、イベントをやること自体が地域づくりや人材育成のOJTとなる。何年もかけてイベントをすることで、OJTをして、そこには、まちづくりの専門家、大学の先生も必要か。起業家などそういう人たちが自由に出入りし、何年もイベントを自然と積み重ねていったら、定着が始まり、創業が始まり、コミュニティを活性化するようなことができないか。
- ・ 田園地域は課題がありすぎるので、来年は、まず実態把握をするための予備調査をやってみようという話を県に提案している。
- ・ ただし、こういう田園地域の魅力づくりする時はやっぱり人づくりが必要なので、OJTの取組みの一つとしてとらえてもらえれば、リンクするのではないかという話をしている。

(前田座長)

- ・全体の話がいろいろ繋がってよくわかった。イベントだけで終わらないという点がとてもいい。まちづくり戦略PTとどう接続するか考えないといけないが、全体の話と組み合わせができそう。これが関係人口 1000 万に繋がっていければ、移住にも寄与するイメージか。

(明石委員)

- ・もちろんそう。自分たちの住んでいる地域はやはりいいという再評価をしてもらうきっかけになり、田園地域ではマンパワーが足りないことから応援部隊も必要であり、総合的に幸せ人口 1000 万になるという筋道はしっかり立っていると思う。

(前田座長)

- ・最近、立山クラフトがあるからということで、立山町に移住した女性がおられる。彼女を追いかけて、いろんな人がまた来てという感じで、イベントがイベントでなくなる日はどこかで急に来る。そのためには 10 年程度かかり、その間継続しないと来ないので、早い段階から長いスパンで市町村や県が応援していることが大事。

(佐藤委員)

- ・専門部会は、毎月別の会場で開催し、私もそこまで県内を回りきれていないので、毎回学びの機会をいただいている。可能であれば、まちづくり戦略PTもリアル開催でお会いしたい。

(前田座長)

- ・別に田園地域だけの話じゃなく、いわゆる過疎化とか課題を抱えた地域において共通する広い文脈でとらえた。今回の意見を踏まえ、県でフレームワークを作るのか。

(竹内局長)

- ・本日いただいたご意見を、どのような制度とするかはまたご相談させていただきたい。次回の会議では、何らかのフレームをお示しできるような形にしたい。